

回会報

149号

新日本美術協会

中尾不二夫会長と逝去

中尾会長は肺炎のため入院加療中のところ昨年暮れの十二月二十五日昼頃容態が急変し同日午後慢性的心不全により苦しむご様子もなく安らかに永眠されました。享年九十五歳。葬儀はご家族による密葬で執り行われました。

「ご家族のお話では、「不幸日朝のこと」「早くアトリエに帰り絵を描きたい」とおっしゃるなど絵に対する情熱は旅立つまで変わらなかった。このことでした。

なお、「ご家族から皆様あて「個人が生前賜りました。厚誼に心から感謝申し上げます」とも「新日美の益々の発展を祈念します。」と伝言を承つてまいりました。

新日美の今後のことについて、当面は会長代行を会則第八条第五項の規定に基づき委員互選により選出することになります。一方、当会の活動は年度計画に従い実施してまいりますので変更等ありません。

生前中尾会長が総会の折「私の願いは、会員が一致し、お互いに親しく相和して協同する。会」といふものになってもらいたいことである。命ある限り立派な会にして、本物の作家が多く出てくる「会」と考えている。「と述べておられました。私ども一人ひとり「遺志」を受け継ぎ、研鑽精進、一致してまいります。

(事務局長・森屋治三)



ありし日の中尾会長
1988年5月

事務局
千葉県柏市大津ヶ丘
3-17-17-401
森屋治三方
TEL 04-7191-6760

編集委員
小高峯夫
富岡ネム
大石 亨
四方公子
早田美智子
原稿常時募集
次号平成27年5月予定

描くことは止められなかった

福島・双葉町で被災のお二人

東日本大震災からもうすぐ四年になります。福島県の双葉町で被災した新日美会員の石澤喜久代さんと準会員の木幡千賀子さん。自宅はお二人共、原発からわずか5〜7キロのところだったので、過酷な避難生活の中でも描き続けられたお二人に電話でお話を伺いました。

石澤さんは「3・11」の丁度その日、ある公募展搬入に向け一〇〇号の大作を送り出し、直後に災害に遭われたそうです。最初の避難先は郡山市の安積高校体育館。とても絵どころではなかったが、展示を終えた公募展からの作品引取り場所を安積高校宛にさせてもらったことなどあつて、先生から「みんなの励みになるから」と絵の道具を譲り受けたといえます。避難所の隅で描き始めたら子供達が寄つてきて一緒にダンボールなどに絵を描き「それはそれで楽しかったですよ」と明るく話してくれました。公募展から戻った絵は、今でも安積高校に飾られているそうです。

避難先の移転等、過酷な状況が続く中、新日美事務局長の森屋さんから「小さな作品でもいいからぜひ出品して」と電話があつたといひます。「連絡を戴いていなかったら描き続けていなかったかもしれない。本当に励まされた」という。駐車場で描いたりしながら複数の公募展に出品を続ける。「どんな環境でも描くことは止められない、私から絵を取つたら何も残らないことを知つた」とのお話に胸が熱くなりました。(事務局長の方は、移転していた役場に電話し、避難先を調べてもらったそうです)

そして、二〇一一年十月、上野の森美術館で開催された三五回新日美展に「希望の朝」(油彩

・F二〇号)を出品、東洋クロス賞受賞となりました。

さて一方の木幡さん。

「大きい絵に取り組んでいる時の気持ちは何とも言えないですね」とやはり前向きです。ご実家は幸い倒壊を免れ、放射線量も比較的低いとのことですが、災害のあとご両親を相次いで見送られたといひます。仕事や介護やとにかく忙しい日々だったけれど

「忙しいと考える暇がなくていいのかも」の言葉に実感が籠っていました。

木幡さんの新日美の出品は二〇一二年の三六回展「戻れないふるさと」の流れ「油彩・F五〇」から。ふるさとの風景を描きたいと、昨年の三八回展には「ふるさと」(油彩・F五〇)を出品。画面を覆う桜が印象的でした。

現在は、お二人ともいわき市に在住。石澤さんのお宅と一緒に大作に取り組んでいるとのこと。

東日本大震災で被災した方は他にもいろいろつしやいます。地震で自宅・工房が破壊された工芸部門の鈴木勇さん、鈴木聡さん(北

石澤喜久代
「希望の朝」



茨城)、油彩の宮本まさよしさん、他の皆さん、それぞれ過酷な中で創作を続けてこられたことに心から敬意を表したいと思います。(文責・早田)



木幡千賀子
「ふるさと」

委員コラム

芦沢利六

最近新日美展で、佐伯祐三のように力強い絵が見られるようになったので、昔、東京都美術館に勤務していた時を思い出しました。朝日晃さんという方で事業課長兼学芸員をしており、「佐伯祐三のバリ」、「そして佐伯祐三のバリ」、「永遠の画家佐伯祐三」などの本を新潮社から発行している。他にもいろいろ出しており私も読ませていただきました。朝日さんは美術館に来る前は神奈川県近代美術館主任学芸員で日本美術評論家連盟会員であつた。

私が美術館に勤務したのは、今の美術館が昭和五十年九月一日オープンして半年後の五十二年四月一日からでした。まだ旧美術館の解体工事をやっている最中でした。旧美術館は裏の駐車場の北側に在りました。今建っているところは野球場でした。美術館に勤め出して二年目くらいの時に、朝日さんと親友で同じ職場の人から絵を描いてみないかと誘われ描くようになった。朝日さんからも、絵は「これで決まりがあつて無いようなものだから、自分で楽しく描けばいいんだ」と言われた。が、そうもいかないで、地元元の絵画教室へ仕事の帰りに行くようになった。入った教室が美術学校受験生を教えている所だった。高校生六人と一般の大人二人という状況だった。

申し込みに行った時にスケッチブック一〇号と鉛筆Hから六Bまで八本用意して下さいと言われた。最初は絵の具は使えないのか？結局一年間鉛筆だけで絵具は使えなかった。途中辞めようと思つたけれど、最終的には先生が亡くなったのを機にやめました。振り返つてみると五年三カ月通つた。

教室通いをやめた後、一人で描いていてもつまらないので五十四年四月、仲間を集めて「稲穂会」と名称付け教室をつくつた。美術館のアトリエを借りて初めは八人だったがだんだん増え十九人になった。外へ描きに行く時は、皆油彩道具持参で重いため日帰りでも泊まりでも殆どマイクロスバスを借りて出かけた。

稲穂会には現名誉会員の桜井力さん、現在委員の宮嶋ふみ子さんもいました。後に日本表象美術会の会長、事務局長になつている人もおりました。

稲穂会は今も続いており現在六人で、月一回湯島天神の裏にある元小学校を拠点に活動し二十三年になる。同じ趣味だから終わりはない、この後も永く続くだろう。